

総合学園の一貫教育に関する一考察

岩下敦哉

1. はじめに

「一貫教育」とという言葉を知り、何を思い浮かべるだろうか。中・高一貫教育、幼稚園や小学校から大学までのエスカレーター式の教育、ミッション系の学園の教育、その他受け取る側により様々なイメージがわいてくるのではないだろうか。

「一貫教育とは何か」ということは専門家に任せるとして、本稿では幼稚園や小学校から大学、大学院を持つ総合大学において、一貫教育というものをどう考えていったら良いのかということについて私が考えていることを述べたいと考えている。あくまでも私見であるのでその点ご容赦いただきたい。

2. 問題の所在・考察のきっかけ

私は自分の母校、社会人になってから通った大学、職場がいずれも一貫教育を行なっている総合学園という環境にあり、様々なスタイルの教育を見てきた。また、他の学園を調査したり、関係者と情報交換する中で、いくつかの疑問を感じた。それは次のようなことである。

- ①一貫教育とは何か。
- ②学校生活はトンネル、ブラックボックスで良いのか。
- ③「画一的な人間を輩出することが一貫教育の目的ではない」のではないのか。
- ④総合学園の一貫教育で何ができるのか。
- ⑤一貫教育は学生・生徒だけの問題ではないのではないのか。

私はこれらのことを素朴な疑問として常に持ち続けており、少し頭の中を整理する形で本稿を進めていきたいと考えている。

3. 一貫教育とは何か

一貫教育のイメージは先に述べたように人それぞれであるが、一般的には、中高一貫教育、高大連携、エスカレーター、小中一貫教育、女子教育、英語教育、ミッション系などがすぐに思いつくのではないだろうか。

また、何を一貫させるのかということになると、カリキュラムを一貫させる、英語教育、国際教育、文化、進学など何か一つの柱に沿って一貫させる、その他人格教育、建学の精神、部活その他課外活動、上級生が下級生の面倒を見るなど学園により様々な教育がある。

ミクロの単位で見ると、「となり合った学校の連携」ということになるが、制度としての一貫教育は次のとおりである。

①小中一貫教育

これは、6歳から15歳を対象とし、小中別学に比べ、10歳を境に変わる子どもの能力を捉えることが可能になる。また、義務教育として一貫していることにより制度的統一感がある。

②中高一貫教育

これは一般的な最もイメージしやすいもので、従来の教育に多い。大学受験への無駄なカリキュラムの重複を減らし、効率の良いカリキュラム編成、受験対策ができるというメリットがある。

また中高一貫教育の実施形態としては、生徒や保護者のニーズ等に応じて、次の3つの実施形態がある。

①中等教育学校

一つの学校において一体的に中高一貫教育を行うもの

②併設型の中学校・高等学校

高等学校入学者選抜を行わずに、同一の設置者による中学校と高等学校を接続するもの

③連携型の中学校・高等学校

既存の市町村立中学校と都道府県立高等学校が、教育課程の編成や教員・生徒間交流等の面で連携を深める形で中高一貫教育を実施するもの

私立学校で一般的に設置されていて、私たちがイメージする「中高一貫校」のほとんどは、制度的には同じ学校法人が別々の学校である中学校と高校を設置する、という形を取っている。

特に私学は「建学の精神」や「私学の自主性」に基づき、独自の判断で柔軟なカリキュラムを組んでおり、実質的に6年一貫の教育を行っているということにおいて、一貫教育と考えても良いと考えられる。

デメリットとしては、義務教育である中学校と高等学校の制度の差、思春期で心身ともに発達が著しい生徒の対応が難しいことや、教育委員会の管轄の違いなどによる学習指導要領の取り扱いなどの問題があることである。

③高大連携

これは、中等教育と高等教育のつながりであり、最近では保護者や社会から注目されている部分である。

高等教育の入口を考える上で、大人としての学びをどう考えるか、人生をどう考えるかという部分に関わる大切なところである。

最近では、高大連携の一つの側面として、「つながり教育」の問題があり、今や一般教養やリベラルアーツという次元ではなく、補完教育や補習教育という意味合いがある。新教育課程、学校週五日制、学習指導要領改訂、その他の原因により各大学の大きな課題となっており、また、入学者層や学年などで状況が全く異なることから、大学にとっても避けて通れない課題となっている。

本来この時期は、進路選択の大切な時期であり、一貫教育の学園においては、上の大学に進みたい進路・学部がない場合はどうするか、他大学を受験するか、そのまま進学するか、学力が高い生徒はさらに上を目指すか甘んじるか、などについて本人や保護者、教職員が真剣に考えるプロセスがある。ここでは、進路を見つけることや将来やりたいことを見つけることが大切であり、本人の進路選択において、大学進学のための目的、動機づけには、学術的な興味・関心のほか、将来のビジョンや目標、人生設計、職業選択などの諸要件が関係してくる。

この段階において、大学側から青田買い、囲い込み、単位認定による誘導など様々なアプローチが行なわれ、経験が浅い高校生としては迷いが生じることも多い。

4. 学校生活はトンネルのように中身が見えないブラックボックスで良いのか

最近の傾向として、小学生の保護者が中学受験の相談の際、すぐに出口である大学の就職について質問をすることがあると聞いている。

学校生活や一貫教育は単に入口と出口だけではない。トンネルのように中身が見えないブラックボックスで良いのか。また、答えを1つだけに絞って良いのか。という疑問が生じる。

大学受験の段階でも、入口と出口（受験と就職）しか見ていない可能性があり、興味・関心の中心となっている。

学校生活の中身には、学習だけではなく、課外活動、友人との交流、社会経験など様々な要素が含まれ、学生にとっては「生活そのもの」なのである。その生活の充実なくして学校を語ることはできないのであり、学校に通う意義はまさにそこにあるのではないだろうか。

また、子どもたち（学生・生徒・園児・児童）が社会に出てから、学校という場で学んだこと、その学校生活を通じて吸収したものを活かして、自分らしい生活ができることが大切であり、その力を身につけてほしいと考えている。

そのためには学校に通う本人，通わせる保護者，学校側の関係者がそれぞれ一貫教育ということについて少し整理し，理解を深めていくことが肝要である。

5. 一貫教育の目的は画一的な人間を輩出することではない

インプットする素材が異なれば，当然アウトプットされる結果が異なってくる．それで良いのではないか．

高校と大学だけを考えても附属型，併設型など形も様々で，中高で男女に分かれたり，キャンパスや地域に分かれたり，学力で分かれたり，大学では4年制大学，女子大学，短期大学など，同一法人，別法人であったり，キャンパスを別に持ったり，同じ総合学園の中で違った文化を持った子どもを育てる要素がある．同じ親から生まれても，条件や環境要因などの違いにより，異なった育ち方をするように，同じ学園で育った子どもたちであっても，それぞれの受け止め方により，異なった育ち方をするのは自然なことである．また，そのような多様性を持つことがむしろ大切なのかも知れない．その中に，何らかの共通性やアイデンティティを内包するということが一貫教育の一側面と言えるのではないか．

カラー，〇〇魂など様々な言い方をするが，一貫教育の学園は外部からみると何らかの共通項があり，類型化されることが多い．したがって，すべての人間が同じ型にはまる必要はなく，子どもに合った教育を受けさせ，結果だけで縛らないという視点が必要である．

6. 総合学園の一貫教育で何ができるのか

言い換えれば，「総合学園だからできる一貫教育とは」「総合学園の一貫教育の可能性」ということになるが，総合学園の一貫教育は，学園ごとにスタイルは様々である．意思決定や運営のスタイルが異なり，法人が積極的にけん引する形であったり，緩やかな共同体として各学校が独立していたりする．

それぞれメリット・デメリットがあるが，一貫教育という観点においては，何をどう一貫させるかが課題である．

つきつめれば，「子どもたち（学生・生徒・園児・児童）の成長に合わせた教育を行う」ということにたどり着くのではないだろうか．

総合学園には，発達段階，男女，学力，地域差（キャンパスのカラー）などの要因があり，現場の専門家である教員の対応が重要となってくる．特に発達段階に応じた学校側，教職員の接し方が大切であり，それによるニーズの吸い上げにもつながる．

もう一つは「伝統，文化，教育などに共感し，学校という「場」に集った人間が学校から何らかの影響を受け，その学校にいくつかの足跡を残し，社会に出て貢献する」というプロセスの実現が一貫教育の大きな役割であり，子どもたちの成長に合わせた教育を行うことが大切である．

7. 一貫教育は学生・生徒だけの問題ではない

今や一貫教育は学生・生徒の範疇におさまるものではなく、様々な構成員の存在を意識しなければならない局面になりつつある。

社会人や科目等履修生などのパートタイム学生，エクステンションセンターなどの生涯教育の受講生，大学院生，研究生，留学生，それらの構成員もカラーを共有するというのも一貫教育である。

また，卒業生やその父母，教職員，関係者がその学園に愛情や思い入れをもって関わり，学園との関係性が一生続くというのも一貫教育の一側面である。

今後総合学園の一貫教育を考える上では，そのような視点も不可欠ではないだろうか。

8. まとめ

総合学園には，様々な性質を持つ人が集まり，一定の期間学校という「場」を共有することによって何らかの共通の体験をし，共通の文化に触れ，そしてそれが個人個人の文化の遺伝子の一部として取り込まれる。やがて社会に送り出された時に，それぞれが共通の遺伝子を持ちながら個人としてはそれぞれの個性を持った人として活躍する。その際，〇〇らしさ，〇〇スピリッツといったエッセンスをまわりの人に感じさせ，影響力を持つのである。

言い換えれば，多様性の中に共通性を持たせ，また，共通性を持った多様性を育むプロセスである。

また，総合学園の一貫教育は，年齢・発達・成長の面からも教科教育で一貫させることは難しく，途中で構成員の出入りがあることや学校という場を支えるスタッフのカラー創りをどうするか，など様々な要因・課題が混在している。

しかし，それぞれの個性はありながら，全体としてのカラーをかもしだすことが「校風」であり，時代や年齢，立場や環境が違っていてもその学校に関わることができたという誇りを持つことが一貫教育において大切なことだと考える。